コミュニケーション支援用絵記号標準化の意義と普及について

オフィス・スローライフ／悠紀会病院　林　文博

Keywords：JIS絵記号、ピクトグラムデザイン、UD、AAC、ノーマライゼーション、福祉のまちづくり

標準化の意義

コミュニケーション支援用絵記号作図原則(JIS T0103)

JISコミュニケーション支援用絵記号(JIS絵記号)参考例

高齢化社会、UD(ユニバーサルデザイン)の潮流を背景にして、経済産業省、文科省、厚生労働省が連携し、デザイン、障害児教育等の専門家、言語聴覚士、共用品推進機構などが集まってコミュニケーション弱者の社会的支援を目的に４年をかけて規格化(2005 日本規格協会)した。

規格の骨子はコミュニケーション支援のための絵記号の作図原則である。さらに規格は、絵記号のカテゴリ分類と３１３個の参考例(無償)を伴っている。カテゴリは６つの大カテゴリ(人/動物、様子/動き、飲食物、家の中、家の外、文化/社会)とそれに続く３～４つの中カテゴリよりなる。一般案内用図記号(JIS Z 8210)とのデザインの共有も図っており、公共空間での利用を視野に入れている。図記号と絵記号ともにデザイン形態はグラフィックシンボルであるピクトグラムpictogram＊である。

＊ピクトグラムは、一般に「絵文字」などと呼ばれ、視覚記号の一つである。地と図に明度差のある2色を用いて、表したい概念を単純な図として表現する技法が用いられる。見る側の体験に基づき即座に意味を理解できる。地域・文化の背景を超えて世界に共通するグラフィック形態である。オリンピックサインは有名。

JIS絵記号はコミュニケーションシンボルのＵＤ

JIS絵記号とピクトグラムの関係

JIS絵記号の母体となったのは、カナダのMaharajによって知的障害児のために考案されたPIC(Pictogram Ideogram Communication)であり、数多くのシンボル研究の実績がある。標準化に際してはPIC日本版のデザイン制作基準をベースにJIS委員会で検討が加えられJIS絵記号原則となった。

PIC + UD → JIS絵記号

標準化のメリット

誰にでも！

PERSON 人

・障害(自閉症や失語症も)の別を問わない。
・成人・小児・外国人、誰にでも親和性がある。
・最低限の学習で誰でもわかる:視認性が高い。
・色覚障害者（日本人2.5%）にも公平である。
・参考例(313個)は誰でも無償でダウンロードできる。

どこでも！

PLACE 場所

・日本全国から世界まで同じデザインで流用可能。
・街中サインの案内用図記号と共用化での利用も。
・学校、施設、駅、交番など場所を問わない親和性。
・転校による利用シンボルの変更を避けることができる。

いつまでも！

TIME 時

・流行(時代性)に左右されない：１００年続く世界共通のグラフィックデザインの形態。
・生涯に亘って利用できる：かわいいイラストシンボルとは異なり、子供の成長後も使用に違和感がない。
・いつでもネットからダウンロードができる。

＋ 支援の方法(指差しコミュニケーション)も普及させることができる。

一般社会への普及が容易である
↓
言語障害児･者の社会参加を支援

↓

言語障害児･者の生活空間の拡大

=

ノーマライゼーション

UD や ICF の啓蒙と「福祉のまちづくり」に貢献

普及と今後の課題

JIS絵記号利用のAAC

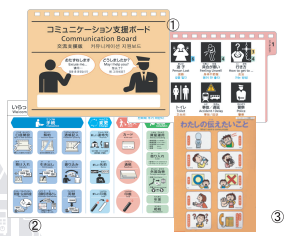
JIS絵記号と作図原則に準じて制作された絵記号を基にしたAACツールが、印刷物、ソフトウェアとして制作、研究開発がされている。

①PICBOOK(ブレーン出版)
②コミュニケーション絵本(夢創工房)
③絵文作成ツール(産業技術研究所)
④PicTalk(オフィス・スローライフ)

公共スペースでの支援

首都圏を中心に、交番・パトカー、駅、銀行、またコンビニなど公共空間での支援を目的にJIS絵記号もしくは同じ構図でのイラスト絵のコミュニケーション支援ボードが無償で配布されている。

①交通エコロジー・モビリティ財団
②全国銀行協会
③明治安田こころの健康財団



案内用サインと共用

JIS絵記号は分かりやすいピクトグラムとしての長所を生かして学校、病院内など屋内また屋外の案内用のサインとしても共用が図れる。

①大阪金剛コロニー
②小野郡山線(福島県北建設事務所)
③悠紀会病院

各種メディアへの応用

Windows OSまたワープロソフトの一太郎でのフォントの開発、さらにホームページ、雑誌、カタログ、自治体のパンフでのアイコンとして利用など様々なメディアでの活用がされている。

①「よいこの学習」(学研)
②しみん便利帳（山口県萩市）
③ウィンドウズ用フォント
（「外字神社」無償）
④国際こども図書館ホームページ

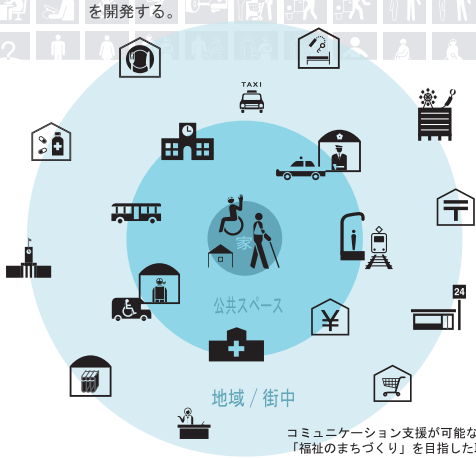
資料提供:ピクトグラムの利用と普及を考える会　http://pic-sign.org/

今後の課題

① AAC利用を増やす：多くの言語聴覚士と特別支援学校の教師に広く利用してもらう。
広報･宣伝の強化。

② 利用施設･空間の拡大：サインを含めて利用可能な施設や空間を増やす。関連する各業界団体へ普及活動を行う。

③ 絵記号の質量の充実：デザイン原則に準拠したシンボルの数を増やす。約１５００個（現在）→３０００個以上へ。語彙データベースや現場の要望に応じたシンボルを開発する。



コミュニケーション支援が可能な空間の拡大
「福祉のまちづくり」を目指した取組みが必要